転校?（ちづるの人生）

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転校？（ちづるの人生）

【Ｎコード】

Ｎ５９７７Ｊ

【作者名】

大輔華子

【あらすじ】

『転校』の続編です。段々ホラーになっていきます。苦手な方はご注意下さい。

私の名は森本ちづる。
現在、K県の私立高校二年に在籍。しかし、先月初めより不登校となり、これまで約一ヶ月の間、私は、『私の部屋』に閉じこもり、土曜夜の外出の時以外、外の空気に触れることはない。
私の両親は共に、俗に言う犯罪者で、ここ数年音沙汰なしのようである。
そのためか、『私の部屋』は鉄格子こそないものの、牢獄のような孤児受入施設の地下にある。食事は、毎朝晩2食が、地下廊下へ通ずる階段の上、床の上に律儀に届けられる。
私は決して犬や猫ではないから、これは食べないことにしている。そのかわり、その『餌』は私の友達である動物に与えることにしていた。つい最近、私の動物達がいなくなるまでは。私が不登校になった原因はというと、先月半ばに我が校へやって来た一人の転校生の、狂気に満ちた行動によるものだ。
その名を、大川華子という。その女に煽(あお)られ行動を共にする者、斉藤恵、吉川香苗、坪井美香、中村洋子、山北薫、島根理香子、水口多恵。そして浜崎英子お嬢様の姿もあった。

私は、衣食住には困らない。学費は要らないし、制服が破れたと言えば買ってもらえる。ノートがなくなったといえばこれも買ってもらえる。
毎週土曜日になると、私は制服を着替え市内のクラブへ行き、そこへ来たお客と店を出て、たんまりとお金を貰う。店にはお客から貰った金のうち、一人当たり1万四千円を渡せば良い事になっている。
一ヶ月の小遣い収入は大体15万から18万だ。
父親は覚醒剤所持犯で服役中だと聞いている。であるから、私はその類のことにはすすめられても手を出さないことにしている。

学校にいけなくなったら困るからだ。勉強は嫌いだから、したことはないが、私は『人間』なので、クラスのみんな、つまり『人間』の顔を見て生きていくことにしている。
私は、これまで何回か学校の女子生徒や男子生徒に話し掛けようとしたことがある。彼ら、彼女らはそんな時、必ずと言っていいほど、私にお金を差し出す。私は決して『乞食』ではないから、そのことをかなり不愉快に思う。そうなると、私はとても寂しくなって、剃刀を振り回すことになるのだ。また、私が物を盗むと思っている人達がいる。しかし、私は人のものは盗まない。
母親も万引きの常習犯のようであり、父親の覚醒剤と同じ理由で、私はこれ（盗み）もしないことにしている。
私は真犯人を知っている。

私は小説が好きであるから、私の部屋には本棚があり、お気に入りの小説が並んでいる。
私は不登校となった時から、これに倣って小説を書くことにした。小説の主人公は背の高い女性で、彼女には愛すべき兄がいることにした。両親はいない。
ここから先は、私の小説である。現実話ではない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
私は昨年、中学に進学しました。３歳年の離れた兄は、昨年、中学の卒業後から、私のいる孤児施設の近くの運送会社に泊まりこみで働いています。
私は、登下校の途中で、車の助手席に兄がいるのを見かけたことがありますが、大抵は倉庫にいて荷物を運んだり荷降ろしを手伝っていたりしています。
土曜日は週休日にしているようで、兄は必ず毎週土曜日、小奇麗な施設の門をくぐり私に会いに来てくれます。
そんなことで、私は毎週土曜日午後、兄と一緒に施設を出て商店街

にくりだします。
それからが楽しい時間です。お決まりの定食屋で日替わりのお昼ご飯をとり、そのあと本屋さんで二人、立ち読みをします。
本屋さんの隣はペットショップです。私はリスがすごく好きです。
ある日私が兄にリスが欲しいと言うと、兄は大きな籠と一緒に2匹のリスを買ってくれました。餌も付けて。
兄は、その後、月に1回、1匹づつ私にリスを買ってくれる。私はリスは好きだけれど、あまり多くなると育てるのが大変なので、兄には悪いけれど、途中からは近くの林に逃がしてしまっています。だから私は兄に自分の部屋を見せることができません。私が「お兄ちゃん、リスは育てるの大変だよ。」と言うと、今度はインコなどの小さくて綺麗な鳥を買ってくれるようになりました。育てるのもっと大変なんですけれど。。。これも、毎週1羽ずつ。
駅前には映画館とゲームセンターがあります。しばらくゲームを楽しんでから、脇にあるファストフード店でジュースを飲みながら、私は楽しい学校のこと、兄は、職場のことや配達先での面白い人や出来事を沢山語り合い、最後は別れを惜しむことになります。
私のいる施設では、誰でも必ず5時までに帰っていなければなりません。
今日の夕ご飯は何かな？昨日はおいしくてあったかいクリームシチューでした。
それに、バターの香りたっぷりのロールパン。サラダにはたっぷりのドレッシングをかけて。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
小説を書きながら、ふと、時計に目をやると、そのガラス面にはある女の姿が映っていた。
私が振り向くと開いたドアの外に女が立っていた。浜崎英子。お嬢様だ。
「森本さん。」と英子。

私は彼女を手のひらで部屋に招き入れ、立ち上がって行ってドアを閉めた。

いつもの土曜出勤から日曜日朝、施設寮へ戻った私は、寮の入り口近くにK県警察と描かれた車両と複数の警察署員の姿を見た。
『ＰＯＬＩＣＥ』と描かれた服を着ている署員は私の姿を見つけると、すぐに私を指差して、管理人と何やら一言二言会話をし、周りの署員と頷きを交わした。
複数の署員が駆け寄ってきて、私を取り囲み、その一人が「森本ちづるさんですね。」と言ってきた。
私は「そうだよ。」と答え、質問をしてきた警察署員に対峙した。
「浜崎英子さんという子を知っているよね。」私は無言で頷いた。
「三日前の木曜日の下校時から行方が分からなくなって、昨日、家の方から捜索願が出た。君は何か知っていることはないか。」
「知らないよ。」
そう言って私が署員の間から抜けようとしたその時、署員は私の腕を掴んで輪の中に引き戻した。
「本人の携帯電話が、今、この施設付近から信号を発信しているんだよ。おそらく施設の中だ。」
「そう。じゃあ捜せば？」と私。
「そうか、わかった。ではそうさせてもらう。その間、君には車の中にいてもらおう。」
署員はそう言って顎で他の署員に指示を送った。
署員はマスターキーを管理人から受け取り、施設の中へぞろぞろと入って行った。私は二人の署員に挟まれるようにして車へ連れて行かれ、そして中へ押し込まれた。

その後、私は警察署でひどく追及を受けた。
失踪後、彼女が私の部屋へ来ていたことまでは確信しているらしい。

しかし彼女の姿がある訳がない。彼女は、私から指示を受け取り、部屋を出て行ったのだ。
その時、携帯電話を置き忘れて行ったことはとても面倒臭いことになった。

私は『犯罪者』ではないから、追及が可笑しくて終始笑っていた。
私は、取調べを受けている間に、書きかけた小説の続きを考えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私には、学校の同級生で親友がいます彼女はお金持ちの一人娘で、西洋人形のような愛くるしい瞳でいつも私に話し掛けてきます。
彼女は小学校四年生のときに同じ学校へ転校してきて、一緒の中学校へ進学しました。それ以来のお友達です。
学校から帰ると、二人で仲良くお出掛けです。
彼女は、お小遣いを沢山持っているので、孤児の私に色々と欲しいものを買ってくれました。
でも時々珍しいものもくれようとすることがあります。
トロフィーとか、沢山の学校の名前が入った旗だとか。珍しいメダルなんかも。
彼女曰く、『レアモノ』ですが、私は欲しくないので変なものはもらわないことにしています。

毎週日曜日には、彼女は私の部屋で遊びます。お話をしたり、テレビゲームをしたり。そんな時彼女は私に色々と悩み事などを話します。
私は、何だか彼女のお姉さんになったような気になって相談にのってあげます。
彼女はいつも私の話しに「うんうん。」と言って大きく頷きます。
彼女はそのかわり何でも私の言うことを聞いてくれます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「いい加減にしないか！！」背広の警察署員はついにぶち切れたような大声をあげた。

「話す気がないなら、その気になるまでぶちこんでおくぞ。」

こうして私は、鉄格子のある部屋に入れられた。壁際には薄い毛布。トイレと食事の取り出し口だけの部屋だった。

一切の人間とのかかわり合いを絶たれて、いったい何日くらい経ったのだろう。

私が、薄暗い部屋で目をさますと、そこには警察署員が立っていた。鉄格子のある部屋を出たあと、私はいくつかの書類にサインと母印をさせられた。

警察署員は車で施設の入り口まで送る、と言ったが、私は断った。

私にはやっぱり行くところがあったからだ。

学校だ。

その時、私の頭の中の小説で兄の声がした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

兄は私にいつもこう語りかけます。

「おまえは『人間』だから、『人間』の顔を見て生きて行かなければならないんだよ。一生。わかったね。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私が学校に姿を現すと、クラスの皆は色めきたってさまざまな行動を起こした。席について顔を伏せる者、唖然として口をあけたまま立っている者、立ったままその後ろに隠れる者、教室を出て行き職

員室へ向かう者。
教壇の前の席、そこが私の席だ。
隣はあの大川華子の席だ。私を不登校にしたその張本人の姿はない。
いる筈がない。
（浜崎英子の仕打ちにおまえは耐えられるわけがないんだよ。）

「森本さん。」
後ろから声がして振り向くと、そこには大川華子が立っていた。
華子は、「ごめんなさい。私が悪かったわ。一言それを言いたかった。でも
もう私はこの学校に居られないの。」
「・・・・・・。」華子が言う。
「あなたが学校へ出てくるためには、私が居てはいけない、ということがわかったの。」「あなたが何故、私やクラスのみんなに嫌がらせをするのか分からないし、クラスのみんなが何故私を恐れて避けているのかもわからない。この一ヶ月の間、あなたは学校へ来なかったけれど、そこには常に姿の見えないあなたがいて、みんなはあなたに従って動いている。これは普通の人間の『力』じゃあないわ。」
私は華子の訳の分からない話につい可笑しくなって、言ってやった。
「そんなことに興味ないんだよ。馬鹿だ。本当の馬鹿だ。おまえは。」
私の言葉を無視し、なお華子が続ける。
「私、あなたのお母さんに会いに行ってみたの。」
「母親なんてものはもういないよ。昔、母親だっただけだ。」「ううん。れっきとしたお母さんがいたのよ。ちづるはどうしてる？って。」
「うるさいんだよ、おまえは！切られたいか！」
「あなたのお母さん、万引きの常習犯なんかじゃあないわ。」
（この女、このまま帰してはいけない。）

私の頭の中を殺意に似た感情が走り抜けていった。
しかしこの女、まだまだ続ける。
「本当に言いたくなかったけれど、お別れだから言うわ。」
「あなたのお母さんは、当時三歳になるあなたのお兄さんを殺めたのよ。」
「！！！」
私の心の中にかつて味わったことのない激しい衝撃が走った。
そして急激に殺意が失せていくのを感じた。
（私に兄がいた？！）
そのとき、不意にまた、私の頭の中の小説で兄の声がした。＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
そして兄は私にこうも語りかけます。
私には何だかよく意味がわかりません。なぜそんなことにこだわるのかが。
「苦しいとき、悲しいとき、楽しいとき、嬉しいとき、『人間』は戦うにしろ、群れるにしろ、互いにかかわりあうから、『人』ではなくて『人間』なんだ。わかるかい？」
「一人で生きていて楽しいだなんて思ったら絶対にだめだよ。僕はいつもおまえのそばについていてあげるけど。僕はね。おまえの『人』としての力になってあげることができないから。」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
『転校？　平成２２年２月』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5977j/

転校?（ちづるの人生）

2010年10月25日09時05分発行